

- 1~8のうち6問以上解いて提出することが想定されています。1問20点です。
- 合計で $n$ 問解いて, それらの点数が $20 \geq p_1 \geq \dots \geq p_n \geq 0$ のとき,  $p_1 + \dots + p_m$ をレポートの点数とします(ここで $m = \min\{6, n\}$ )。
- 演習の成績は, レポートの成績と定期試験の成績によって決まります。
- レポートには表紙を付けて, 「数学基礎理論演習レポート (S2 ターム火曜5限, 理1 2,4,5,8組)」と明記したうえ, 学籍番号と氏名と解いた問題番号も記入してください。
- 手書きでなく TeX 等による清書もちろん OK です。
- レポート用紙は A4 のものを使い, 複数枚になる場合は左上をホッチキスで閉じてください。
- 2017年7月17日(月) 18:00 までに, 教務課のレポートボックスに提出してください。
- 2017年7月18日(火)の演習で解答を配ります。

訂正:

- 6/27の演習で配った解答のうち「4」とページ番号があるものは, 間違いを含んでいます。
- 該当者は10名以下ですが, 注意してください。まぎらわしい誤りを挙げると:  
 (A1) 「 $\theta_1 \rightarrow 0, \theta_2 \rightarrow 0$ 」 $\rightarrow$  「 $\theta_1 h \rightarrow 0, \theta_2 k \rightarrow 0$ 」  
 (A4) 「 $\exists \theta_1 < 1, \exists \theta_2 < 1$ 」 $\rightarrow$  「 $0 < \exists \theta_1 < 1, 0 < \exists \theta_2 < 1$ 」  
 (A5) 「偏微分可能でない」 $\rightarrow$  「偏微分可能である」
- <http://www.kurims.kyoto-u.ac.jp/~tshun/2017s2.html>にあるものに差し替えるか, 今日, TAに正しいものをもらってください。
- たいていの人は, ページ番号のない解答を持っています。その場合はそのまま OK です。

1  $\sin 1 = 0.8414709848\dots$ の近似値を,  $1 - 1/3! + 1/5! - 1/7! + \dots$ を打ち切ることで50桁程度の精度で求めたい。つまり $|\sin 1 - a_N| < 10^{-50}$ となるには $N$ をどうとればよいか?ここで

$$a_n = \sum_{k=0}^n \frac{(-1)^k}{(2k+1)!}.$$

2 以下の $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$ は, 全微分可能だが,  $C^1$ 級でないことを示せ。

$$f(x, y) = \begin{cases} (x^2 + xy + y^2) \sin \frac{1}{x^2 - xy + y^2} & (x, y) \neq (0, 0) \\ 0 & (x, y) = (0, 0). \end{cases}$$

3  $f: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ は $C^3$ 級で,  $\exists \alpha \in \mathbb{R}, f(\alpha) = 0, f'(\alpha) \neq 0$ とする。

- (a)  $\exists \delta > 0, \forall x \in (\alpha - \delta, \alpha + \delta), f(x) = 0 \Rightarrow x = \alpha$ を示せ。  
 (b)  $g(x) = x - f(x)/f'(x)$ にテイラーの定理を適用することで, 以下を示せ:

$$\exists \delta' > 0, \exists C > 0, \forall x \in (\alpha - \delta', \alpha + \delta'), |g(x) - \alpha| < C|x - \alpha|^2$$

4] 微分可能な関数  $f: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$  を考え、 $g = f'$  とする。  $a < b$  について  $g(a) > 0 > g(b)$  のとき、 $a < \exists c < b, g(c) = 0$  を示せ。

5] 以下の行列の行列式を求めよ。

$$(a). \begin{pmatrix} -1 & -1 & 1 & -1 \\ 3 & 1 & -2 & 5 \\ -2 & 3 & 2 & 4 \\ 2 & -1 & 1 & 3 \end{pmatrix}, \quad (b). \begin{pmatrix} 0 & 1 & -2 & 0 \\ -1 & -1 & 2 & 1 \\ -3 & 0 & 2 & 3 \\ 4 & 3 & 0 & -1 \end{pmatrix}.$$

6]  $x_1 \sim x_5$  を未知変数とする以下の連立方程式を解け。(b) では、解を持つための定数  $a$  の条件を求め、その条件下で解を求めよ。ただし、変数・パラメータ共に実数の範囲を考える。

$$(a). \begin{cases} x_1 + 2x_2 + x_4 - x_5 = 2 \\ x_1 + 2x_2 + x_3 + 2x_5 = 5 \\ -2x_1 - 4x_2 + 2x_3 - 3x_4 + 6x_5 = 3 \\ -3x_1 - 6x_2 + 2x_3 - 3x_4 + 5x_5 = 2, \end{cases} \quad (b). \begin{cases} 2x_1 + 3x_2 - 5x_3 + x_4 = a \\ x_1 + 2x_2 - 2x_3 - x_4 = 1 \\ x_1 - 4x_3 + 5x_4 = 3. \end{cases}$$

7] 以下の行列  $A, B$  について、それぞれ対角化可能かどうか調べ、対角化可能な場合は  $D := P^{-1}AP, D' := Q^{-1}BQ$  が対角行列になるような可逆行列  $P, Q$  と対角行列  $D, D'$  を求めよ。

$$(a). A = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 & 0 \\ -6 & 4 & 2 & 2 \\ 6 & -3 & -1 & -3 \\ 0 & 0 & 0 & 2 \end{pmatrix}, \quad (b). B = \begin{pmatrix} 1 & 5 & 1 & -5 \\ 4 & 1 & -4 & 5 \\ 6 & 3 & -4 & 4 \\ 5 & -1 & -5 & 8 \end{pmatrix}.$$

8]  $\ell \geq 2$  とする。  $X_1, \dots, X_\ell \in \{A, A^{-1}, B, B^{-1}\}$  について、  $X_1 X_2 \cdots X_\ell = E_3$  ならば

$$1 \leq \exists j < \ell, (X_j, X_{j+1}) = (A^{\pm 1}, A^{\mp 1}), (B^{\pm 1}, B^{\mp 1})$$

を示せ。ここで  $A, B$  は以下の回転行列である。

$$A^{\pm 1} = \begin{pmatrix} \frac{1}{5} & \mp \frac{2\sqrt{6}}{5} & 0 \\ \pm \frac{2\sqrt{6}}{5} & \frac{1}{5} & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad B^{\pm 1} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & \frac{1}{5} & \mp \frac{2\sqrt{6}}{5} \\ 0 & \pm \frac{2\sqrt{6}}{5} & \frac{1}{5} \end{pmatrix}.$$

## 1 復習

(全) 微分可能性 :  $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$  のまわりで定義された  $f$  が,  $\mathbf{x}$  で微分可能とは (以下  $\mathbf{a} \cdot \mathbf{h}$  は内積)

$$\exists \mathbf{a} \in \mathbb{R}^2, \lim_{\mathbf{h} \rightarrow 0} \frac{f(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - f(\mathbf{x}) - \mathbf{a} \cdot \mathbf{h}}{|\mathbf{h}|} = 0. \quad (1)$$

性質 :  $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$  のまわりで定義された  $f$  について :

1.  $\mathbf{x}$  で全微分可能ならば,  $\mathbf{x}$  で連続である
2.  $\mathbf{x}$  で全微分可能ならば,  $\mathbf{x}$  で偏微分可能で  $\partial_i f(\mathbf{x}) = \mathbf{a}_i$  ((1) の記法を用いた)
3.  $f$  が  $\mathbf{x}$  で連続偏微分可能 ( $C^1$  級) ならば,  $f$  は  $\mathbf{x}$  で全微分可能である

## 2 連鎖律

勾配ベクトル :  $f$  を  $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$  のまわりで定義された偏微分可能な関数とする.  $\mathbb{R}^2$  のベクトル

$$\text{grad } f(\mathbf{x}) = (\partial_1 f(\mathbf{x}), \partial_2 f(\mathbf{x}))$$

を  $f$  の  $\mathbf{x}$  での勾配ベクトル, あるいはグラディエントとよぶ.

連鎖律 :  $f$  を  $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$  のまわり  $U$  で定義された全微分可能な関数とする.  $\gamma$  が  $t_0 \in \mathbb{R}$  のまわり  $I$  で定義された微分可能な関数で,  $\forall t \in I, \gamma(t) \in U$  であれば, 合成関数  $f \circ \gamma$  も  $I$  で微分可能で

$$\frac{d}{dt} f(\gamma(t))|_{t=t_0} = \text{grad } f(\gamma(t_0)) \cdot \gamma'(t_0).$$

連鎖律の系 1 :  $f$  を  $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$  のまわり  $U$  で定義された全微分可能な関数とする.  $\mathbf{h} \neq \mathbf{0}$  について,  $\mathbf{x}$  と  $\mathbf{x} + \mathbf{h}$  を結ぶ線分が  $U$  に含まれるとき

$$0 < \exists \theta < 1, f(\mathbf{x} + \mathbf{h}) - f(\mathbf{x}) = \text{grad } f(\mathbf{x} + \theta \mathbf{h}) \cdot \mathbf{h}.$$

(証明)  $\gamma : [0, 1] \rightarrow U, t \mapsto \mathbf{x} + t\mathbf{h}$  として,  $g = f \circ \gamma$  を考える. 連鎖律より  $g$  は  $(0, 1)$  で微分可能で,  $\forall t \in (0, 1), g'(t) = \text{grad } f(\mathbf{x} + t\mathbf{h}) \cdot \mathbf{h}$  である.  $g$  に平均値の定理を適用して,  $0 < \exists \theta < 1, g(1) - g(0) = g'(\theta)$  だが, これを書き直したものが主張そのものである.

方向微分 :  $f$  を  $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$  のまわりで定義された関数とする.  $|u| = 1$  なるベクトル  $\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2$  について

$$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(\mathbf{x} + h\mathbf{u}) - f(\mathbf{x})}{h}$$

が存在するとき, これを  $\mathbf{x}$  における  $\mathbf{u}$  向きの  $f$  の方向微分とよび  $\partial_{\mathbf{u}} f(\mathbf{x})$  とかく.

連鎖律の系 2 :  $f$  を  $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$  のまわり  $U$  で定義された全微分可能な関数とする. このとき  $|u| = 1$  なる任意のベクトル  $\mathbf{u} \in \mathbb{R}^2$  について,  $\partial_{\mathbf{u}} f(\mathbf{x})$  が存在し

$$\partial_{\mathbf{u}} f(\mathbf{x}) = \text{grad } f(\mathbf{x}) \cdot \mathbf{u}.$$

### 3 練習問題

(A1) 以下の  $f$  について  $\text{grad } f$  を求めよ.

1.  $f(x, y) = x^2 + y^2$
2.  $f(x, y) = ax + by + c$
3.  $f(x, y) = xy(x + y - 3)$

(A2) 以下の  $f$  について, 指定された点と向きにおける方向微分を求めよ.

1.  $f(x, y) = x^2y$ , 点  $(2, -1)$ , 向き  $(1/\sqrt{2}, 1/\sqrt{2})$
2.  $f(x, y) = \log \sqrt{x^2 + y^2}$ , 点  $(-1, 1)$ , 向き  $(1/\sqrt{5}, 2/\sqrt{5})$
3.  $f(x, y) = (x + y)^2$ , 点  $(2, 2)$ , 向きは最大増加の向き

(A3)  $f: \mathbb{R}^2 \setminus \{\mathbf{0}\} \rightarrow \mathbb{R}$  を微分可能とする.  $f(x, y)$  を極座標で  $g(r, \theta)$  と書いたとき:

1.  $(\partial_r g)^2 + (\partial_\theta g/r)^2 = (\partial_x f)^2 + (\partial_y f)^2$ .
2.  $f$  が  $C^1$ 級ならば  $g$  は微分可能

(A4)  $f$  は  $U(\mathbf{0}; 1) = \{\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2 \mid |\mathbf{x}| < 1\}$  で定義された微分可能な関数とする.  $\forall \mathbf{x} \in U(\mathbf{0}; 1), \text{grad } f(\mathbf{x}) = \mathbf{0}$  ならば,  $f$  は  $U(\mathbf{0}; 1)$  で定数であることを示せ.

(A5) 前回の演習で  $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$  として

$$(x, y) \mapsto \begin{cases} \frac{x^3}{x^2+y^2} & ((x, y) \neq (0, 0)) \\ 0 & ((x, y) = (0, 0)) \end{cases}$$

を考えると

- $f$  は  $\mathbf{0}$  で連続でかつ偏微分可能
- $f$  は  $\mathbf{0}$  で全微分可能ではない

なる例になっている, という問題だったが「 $f$  は  $\mathbf{0}$  で全微分可能ではない」の解答を書き忘れていました. 今回, 方向微分を考えることで,  $f$  が  $\mathbf{0}$  で全微分可能でないことを示せ.

(A6)  $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$  は

$$\forall t \in \mathbb{R}, \forall \mathbf{x} \in \mathbb{R}^2, f(t\mathbf{x}) = t^m f(\mathbf{x})$$

となるとき,  $m$  次同次関数とよばれる (簡単のため  $m \geq 1$  は自然数とする).  $f$  が微分可能であれば  $x_1 \partial_1 f + x_2 \partial_2 f = mf$  を示せ.

- (A1) 1.  $\text{grad } f = (2x, 2y)$ .  
 2.  $\text{grad } f = (a, b)$ .  
 3.  $\text{grad } f = (y(2x + y - 3), x(x + 2y - 3))$ .
- (A2)  $f$  が微分可能であることの確認は省略する.  
 1.  $\text{grad } f = (2xy, x^2)$  より  $\text{grad } f(2, -1) \cdot (1/\sqrt{2}, 1/\sqrt{2}) = 0$ .  
 2.  $\text{grad } f = (x/(x^2 + y^2), y/(x^2 + y^2))$  より  $\text{grad } f(-1, 1) \cdot (1/\sqrt{5}, 2/\sqrt{5}) = 1/2\sqrt{5}$ .  
 3.  $\text{grad } f = (2(x + y), 2(x + y))$  より  $\text{grad } f(2, 2) = (8, 8)$  で、最大増加の向きはこの向きなので向きは  $(1/\sqrt{2}, 1/\sqrt{2})$ . この向きの方向微分は  $(8, 8) \cdot (1/\sqrt{2}, 1/\sqrt{2}) = 8\sqrt{2}$ .
- (A3) 1.  $\theta$  を固定する.  $\gamma : \mathbb{R}_{>0} \rightarrow (\mathbb{R}^2 \setminus \{\mathbf{0}\}), r \mapsto (r \cos \theta, r \sin \theta)$  に  $t_0 = 1$  として連鎖律を適用すると,  $\partial_r g = \text{grad } f(x, y) \cdot (\cos \theta, \sin \theta)$ . 同様に  $\partial_\theta g = \text{grad } f(x, y) \cdot (-r \sin \theta, r \cos \theta)$ . よって
- $$(\partial_r g)^2 + (\partial_\theta g/r)^2 = (\partial_x f \cos \theta + \partial_y f \sin \theta)^2 + (-\partial_x f \sin \theta + \partial_y f \cos \theta)^2 = (\partial_x f)^2 + (\partial_y f)^2.$$
2.  $\mathbb{R}_{>0} \times \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2, (r, \theta) \mapsto (r \cos \theta, r \sin \theta)$  は連続なので,  $f$  が  $C^1$  級ならば  $g(r, \theta)$  は  $C^1$  級である. よって  $g$  は微分可能である.
- (A4) 任意の  $\mathbf{x} \in U(\mathbf{0}; 1)$  について,  $\mathbf{0}$  と  $\mathbf{x}$  を結ぶ線分は  $U(\mathbf{0}; 1)$  に含まれることに注意しておく. 連鎖律の系 1 より  $0 < \exists \theta < 1, f(\mathbf{x}) - f(\mathbf{0}) = \text{grad } f'(\theta \mathbf{x}) \cdot \mathbf{x} = \mathbf{0}$  なので,  $\forall \mathbf{x} \in U(\mathbf{0}; 1), f(\mathbf{x}) = f(\mathbf{0})$  が示された.
- (A5) 方向微分の向き  $\mathbf{u} = (u_1, u_2)$  を固定する ( $u_1^2 + u_2^2 = 1$ ).  $f(h\mathbf{u}) = hu_1^3$  より (ちなみにこれは  $h = 0$  でも正しい),  $\partial_{\mathbf{u}} f(\mathbf{0}) = u_1^3$  である. もしも  $f$  が微分可能とすると,  $\text{grad } f(\mathbf{0}) = (1, 0)$  より (これは  $\mathbf{u} = (1, 0), (0, 1)$  のときをそれぞれ考えるとえられる), 連鎖律の系 2 より  $\partial_{\mathbf{u}} f(\mathbf{0}) = (1, 0) \cdot (u_1, u_2) = u_1$  となる. よって矛盾が生じた.
- (A6)  $\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2$  を固定して  $g(t) = f(t\mathbf{x}) - t^m f(\mathbf{x})$  とおく.  $\gamma : \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}^2, t \mapsto t\mathbf{x}$  として  $f(t\mathbf{x})$  の微分を計算するために連鎖律を適用すると

$$g' = \text{grad } f(t\mathbf{x}) - mt^{m-1} f(\mathbf{x}) = 0$$

なので  $t = 1$  とすると  $(\partial_x f, \partial_y f) \cdot \mathbf{x} - mf(\mathbf{x}) = 0$ . つまり  $x_1 \partial_1 f + x_2 \partial_2 f - mf = 0$ .